

第23回福井県嶺南地域流域検討会の審議内容のご紹介

早瀬川水系の河川整備計画について

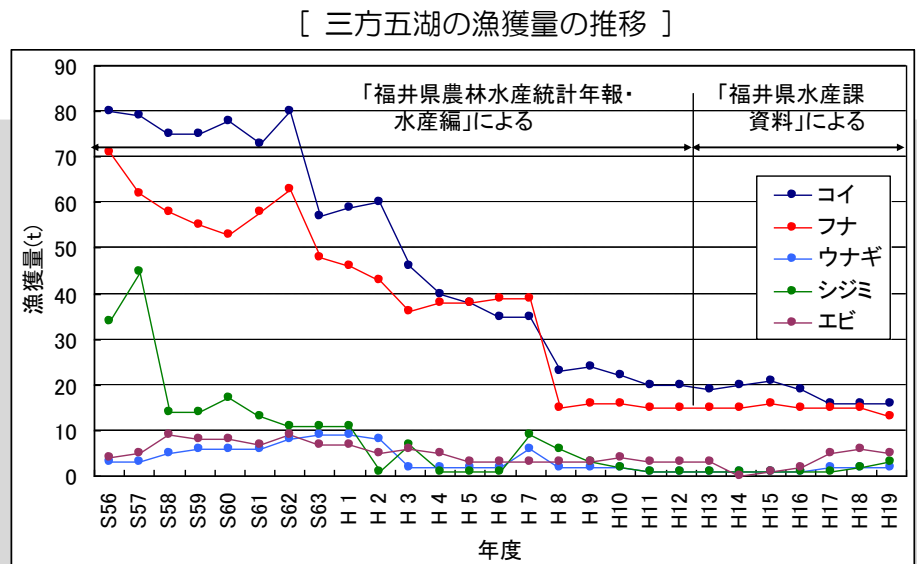
早瀬川水系の河川整備について、河川管理者から説明が行われました。

- 第22回流域検討会における質問事項の回答について
- 早瀬川水系の河川整備に関連する環境改善の取り組みについて

◎委員からの主な意見

1. 漁獲量の推移は、平成8年ごろからは各種類ともほとんど横ばいで、昭和50年代から見るとかなり減少しているが、原因は何か。

⇒【事務局】県が把握しているデータですけれども、原因の特定までには至っておりません。



2. 漁獲量を増やすことが可能か。また、そういう見通しがあれば、教えていただきたい。
⇒【事務局】魚類の生息環境を保全していくことが水産資源の増殖につながると考えます。
3. 漁獲量は、獲らないから少なくなったのか、いないから少なくなったのか。主要な魚の数だけでも、減ったとか、そんなに減っていないとか、そういうデータはないのか。水産資源量を調査したものはないのか。
⇒【事務局】河川管理者が把握している上では、そのような調査のデータはありません。資源量調査がされているかどうかは確認します。
4. 漁獲量の減少は、岸辺の変化、水系のつながりの変化、水質の悪化、外来魚の存在、良好な産卵場の不足等の要因が影響し、次の代が育たないためである。なぎさ護岸整備や水路を生き物が生息できるような構造にするとか、水田魚道により水田を産卵場として利用できるようにすることで魚は増えると考え。魚類減少の要因は多様だが、その一つ一つに地道に対応していく必要がある。
5. 湖岸の5～6割をなぎさ護岸として整備することで効果はてきめんに現れる。かつては鱒川のみならず、湖に注ぐいずれの川も良好な魚の産卵場、生育場であった。
6. 湖周辺の水田等の湿地に飛来していたシギ・チドリ類の減少の原因は？
⇒【事務局】圃場整備等による水田の乾田化で湿地が減少してきたことが考えられます。

7. 良好な水草帯、陸域から抽水植物～沈水植物～浮葉植物と遷移する水辺を作るには適切な水深と水質（透明度）が必要である。

8. 水質は久々子湖、水月湖では徐々に悪化しているようにも見える。水月湖、久々子湖での浄化対策や下水道整備はどのような状況か。

⇒【事務局】流域における下水道等の整備率は100%です。水質の変動については家庭排水はもとより、流域内の社会活動により発生する負荷が複合的に作用しているものと考えます。

9. 固有の特徴を持つ種の魚の存続のために他流域から同種の魚を移入して良いというものではない。

10. なぎさ護岸（植生護岸）の効果は検証されているか？ また、ヨシ帯のみ復元すれば良いというものではなく、抽水植物～沈水植物と遷移していく形を目標に据えるべきではないか。

⇒【事務局】浅い部分ではヨシが繁茂し、魚の産卵場、生育場となっており、徐々に良い環境になってきています。抽水植物～沈水植物と遷移する形を目標とはしていますが、水深の深い部分では、ヒシの繁殖も影響してか沈水植物の生育がかんばしくありません。

11. 三方五湖では、石組護岸および植生帯護岸が施工できそうなところがあり、石組護岸は久々子湖、植生帯護岸は鮎川河口付近が適していると判断していると思われるが、ほかにも対象としているところはあるのか。それとも、全域で施工するということがか。

⇒【事務局】植生護岸整備は、かつて植生帯が分布していた鮎川河口付近を対象として現在整備しています。この区域は、コンクリート護岸整備後に植生帯が消失したため、これを再生するべく、なぎさ護岸（植生護岸）の整備を図っています。

12. 将来的に、何をどこまで再現しようとしているのか。なぎさ護岸については、施工する前にこれでいいのかと様々な検討が必要。

⇒【事務局】現在、植生帯護岸については、自然環境課、海浜自然センター、敦賀土木事務所が参画するワーキンググループによる検討を行っています。今年度から開始される三方五湖水辺生態系再生研究事業での成果を今後参照していきたいと考えています。



13. その他の意見

①「目指すべき環境」として、「小川と田んぼの通路を確立する」を追加してはどうか

②「環境を復元するために必要な対策」として、「冬水田んぼ」を追加してはどうか

③「河川砂礫の減少、細粒化」の対策として「砂防ダム改築による堆積土砂の排出など」を追加してはどうか。